

幼児のきょうだい関係(一)

—きょうだい葛藤の研究—



小西勝一郎

きょうだい関係の重要性

子どもの人格形成に及ぼす要因はいろいろ数えられようが、家庭においてきょうだい関係のあり方も、親子関係のそれと共に大きい要因の一つといえよう。しかもきょうだい関係が、親子のたとえ友人のよこの関係のはしわたし的人格をもつといわれるように、きょうだい関係の影響には親子関係とは違った意味で大きい特性がみられるものである。

幼い時からけんか一つせず、本当に仲のよいきょうだいもあるが、普通は親しいうちにもなにかと競争し、衝突し、対立をくりかえすことが、きょうだい関係なのである。しかしそのような葛藤を経験することによって、彼らは一そうよく理解し、親密さを増すこともできよう。

また互いにかまみし、ゆずりあい、協力することによって、将来の社会生活に必要な基礎を学習することもできる。ひとり子の性格はともすると自己中心的で自立心に乏しく、社会的に未成熟になりがちだといわれるが、それはきょうだい接触の全くないこと、またそれに伴う親の過保護によるわけであり、これも人格形成に与えるきょうだい関係の重要な一面を示すものであろう。

このように良いにつけ悪いにつけ、きょうだい同士の影響は大きいものであるが、しかしまた、きょうだい関係に働く親の立場も無視するわけにはいかないようである。家庭の秩序を保ち、子どもの教育の責任をもつ親が、きょうだい関係に介入し、制約を与えることも当然考えられようし、またその意図をもたなくとも、間接的に微妙な影響を与えるものである。

きょうだいの生活する家庭は、親と子、きょうだいを含んだダ

イナミックな人間関係から成りたっているからである。子どもたちが仲よく助け合う姿は、親にとって大きい安らぎを覚えるが、また彼らの騒ましい争いに悩まされ、興奮し、圧力をかけ、どう扱ってよいか困ることも多いものである。争いの渦中にまきこまれ、誤った扱いが子どもの不信をまねくことも少なくない。きょうだい関係が子どもの自己統制や社会的技術を養う上で大切な経験を与えるものだとすれば、それは親にとっても、まさによい教育のチャンスを与えるものだといえるだろう。親として軽率なふるまいをしないよう考えておくべきことも少なくないと思われる。

きょうだい関係の重要性から、これに関する数多くの研究がすでになされてきている。ただ、今まで述べてきたように、きょうだい関係も家庭の人間関係の一部であるから、最近は特に親との関連についての研究が関心を払われているようにも思われる。この報告もこのような立場にたつて、とくにきょうだい争いを中心に、それと親のとり扱い、態度との関連を調べようとしたものである。

幼児を対象にしたのは、年長児にくらべ、自己中心性の著しい時だから、きょうだい争いも多いと思われること、また親との接触も比較的多く、それだけきょうだい関係と親の関連を把握しよ

調査の方法

簡単にどんな方法で調べたかを述べておこう。対象は大阪市立H幼稚園一年保育児(五歳児)九〇(男、四二、女、四八)名とその母であった。この校区は大阪市西区の中小商業的地区であり、幼児は各種商店、問屋などの家庭出身のものが多くと推定される。ひとり子は除いた。幼児のきょうだい数は、最高六人の子もあるが、平均二・三三人であった。きょうだい間の位置は、長子三一%、中間子二二%、末子四一%を示している。

調査は質問紙とドルブレイを用いた。詳しい内容は後にふれることにするが、質問紙は二四質問からなり、きょうだい関係の実態とその争いに対する親のとり扱いかい、また親の一般養育態度(フェルス親子関係調査項目を参考とする)などを調べようとした。園を通し母に回答を求めた。回収率八六%。

ドルブレイはきょうだい関係と親の態度を、幼児の側から知ろうとしたものである。父母、子ども、赤ん坊それぞれ一定の大きな人形を用い、五場面(きょうだい関係を調べるもの三、親子関係のそれ二)をあらかじめ設け、自由に物語りをさせた。登場人形は幼児の家族構成と必ずしも一致していない。園の一室で個別的に実施した。

ドルブレイに表現された物語りが、幼児の家庭の経験をそのま

ま反映するかどうかは問題としても、ここでは一応その仮定にたつて評定してある。評定の基準は、親子、きょうだい両場面とも、相対的にみて、親和的（親しみ、援助、寛容、協力など）であるか、対立的（敵意、攻撃、疎遠など）であるかによつていゝる。二人の評定者間の一致率はかなり高かつた。

調査期間は昭和四二年七月より九月までである。

この調査はききにあげた目的からまずきょうだい関係の実態を調べ、仲の良いものと良くないものを選んで、両群を比較する手続きをとつた。便宜上きょうだい関係と親の態度との関連については次回にあげたため、ここではまずきょうだい関係の実態を中心に考えておくことにする。

きょうだい仲の良否について

幼児には比較的きょうだい争いも多いのではないかと思われるが、母のみるころはどうかであつたか。第1表の結果がそれである。良否二人のきょうだいをもち幼児は、良くない方に含めてある。これによると、良い方が三二%、仲よくしたりけんかもあるが、まあまあ普通としたもの約半数余り、悪い方は一四%にすぎなかつた。年長児の場合と比較してないからはずきりとはいえないが、幼児のきょうだい関係はそう悪くないといえそうである。つまりきょうだい争いに悩んでいる母は少ないと考えられ

第1表 きょうだい仲（母の場合）

良否	大仲	へんかい よ	なかり よ	ふつ	仲わるい	大へん わるい	計
男	5	10	24	3	0		42
女	4	9	25	9	1		48
計	9	19	49	12	1		90

（数字は人数）

る。まずしつとに關係すると思はれるA場面では、例えば、手をつなぐとしてきょうだいの拒否にあうものが若干あるが、むしろ、仲よく手をつなぐ、母の片方の手をつなぐ、ひとり歩いてゆくなど、親和的な、また対立を避ける表現が多かつた。危機的状況を示すB場面でも、家族一体感をバックとした援助、共同的行動が非常に多かつた。男子は相手をやつつけて勝つ、女子は相手に注意するという差はあるが、ともに泣いているきょうだいをいたわつている。母に連絡し、共同戦線をはるものもある。

しかし所有に關する場面になると、対立關係が非常に多くなつ

る。仲の悪い幼児も、それがすぐ臨床的問題につながるとはいえないであらう。後にみるように、争いの内容と程度も深刻でないようだから。しかしより悪化しないような配慮は、親に必要となつてにちがいない。

第2表はドルブレイの結果である。親和と対立どちらとも判定のつきかねるものは、親和の方にいれてある。きょうだい仲は三場面で違つてあらわれてい

第2表 きょうだい仲 (ドルブレイの場合)

場面	仲		親和	対立	不明	計
	男	女				
A 買物の途手きょうだいが母がきよつなぐ	22	3	4	0	1	25
	21	4				
	43	7				51
B きょうだいが他の子にうだめられる	24	1	0	0	0	25
	26	0				
	50	1				51
C きょうだいが自分の用断用して遊ぶ	7	18	0	0	0	25
	10	16				
	17	34				51

(数字は人数)

具を貸し与え、一しよに遊ぶという極めて寛容で平和的な幼児もあつた。

このようにドルブレイの結果は、その場面の特殊性、つまり子どもの要求とその障害の程度、代償的な解決方法の有無その他の理由によって、一義的に結論できないようである。幼児のきょうだい関係の流動性の一面を示すものかもしれない。ただB場面での親密なきょうだい感情のあらわれ、C場面での母の参加に必ずる行動の変化などからみると、多くの幼児が親和的なきょうだい関係を、すでに基本的にもっているといえそうである。したがっ

ている。玩具の返却を要求し、文句をいい、泣き、叩き、母にいいつけるなど、いろいろの手段がとられていた。ただこれらのうちにも、母の参加によつて、やがて協力親和的態度に転ずるもののあることを注意しなければならぬ。なお全く対立を示さず相手に玩

て時として争いをおこすことはあつても、そうしこりをあとあとまで残すことはないし、かえつてそれは適切な学習の経験となつていえるかもしれない。しかし場面によつて変化しやすい幼児のきょうだい仲の流動的特性からすると、親のきょうだい関係への参加の仕方が非常に大きい意味をもつと考えられよう。

母の回答とドルブレイの結果の間に、有意な相関を認めなかつたが、その理由については、さらに後の問題としたい。

きょうだいげんかについて

幼児のきょうだい仲は、全体に良いものが多いといつても、悪いものがないわけではなく、場面によつては争いも生じやすい。いわば親和と対立は極めて流動的といえるようである。そうして幼児のきょうだい仲の良い場合、けんかの形をとることが多いと考えられるから、数は少ないが仲の良いものを中心にして、彼らがなぜ仲が悪いのか、けんかの面からさらに検討をしておこう。

(1) けんかの動機

第3表は母の答えたけんかの動機を、いくつかのカテゴリーにまとめたものである。これによると、所有、わけまえに関するものが最も多く四六%をしめていた。量的なものは一般に理解しやすいし、子どもは特にそれに敏感であるからであろうか。これは先

第3表 けんかの動機

動機	所有 わけ まえ	権 指 導	力 違	ル ー ル 反	し と	他	計
男女	20 21	9 7	2 2	1 2	2 4	42 48	
良 不 良	30 11	12 4	4 0	1 2	5 1	77 13	
計	41	16	4	3	6	90	

(数字は人数)

にみたドルプレイ場面からも予想されるし、また子どものけんか一般の原因としてあげられるものと一致している。権力、指導力の争いは、相手が意のままにならない、順番争い、チャネルのとりあいなどを意味している。約一八%を示している。ルール違反には、相手が約束を守らないものも含んでいる。しつとに関する動機が意外に少ないようであったが、これについて、

ては、後に項を改めてふれることにしよう。

男女間に大きい動機の差はないが、さきを選んで仲のよくない群には、良群より所有とわけまえに関するものが有意に多かった。幼児に共通する動機であるが、これがなぜ不良群に特に多いのか、さらによく考えておく必要があるであろう。

(2) けんかの程度

けんかの程度を五段階で評定させた母の回答は、第4表の通り。最も乱暴の程度の強い評価に該当するものはなかった。同表によると、けんかの程度は口争いが主で、時々手を出すものが

第4表 けんかの程度

程度	口 あ ら い	そ の 程 度	時 を 出 す	手 な げ	は ん か	乱 暴 な けん か	無 答	計
男女	6 12	23 25	5 7	3 1	5 3	42 48		
良 不 良	17 1	41 7	11 1	3 1	5 3	77 13		
計	18	48	12	4	8	90		

(数字は人数)

五三%をしめている。乱暴なけんかはさすがに少ない。幼児のけんかは年長の子同士のけんかと違い、体力も弱いから、そう危険を感じないかもしれない。口争いの程度なら特にそうである。しかし乱暴なけんかは親も注意する必要がある。後でみるようにけんかの相手は年長者が多いからである。相手が年少の場合にも、相手の危険を認識し、手ごころを加える能力の

乏しい幼児のことであるから、やはり親として年少を保護する必要もあるだろう。

男女別、良、不良群別に大きい差を認めなかった。

(3) けんかの相手

きょうだい関係はきょうだいの人数、順位、年齢差、性別などに左右されるといわれる。けんかの場合でも同じであろう。したがってその相手との関係を明らかにしておくことにしよう。さきに省略しておいたが、第1表に示したきょうだい仲の相手について、ここにふれてみると、第5表がそれである。良群の相手はき

第5表 きょうだい仲の相手

相手	兄	姉	弟	妹	年長	年少	同性	異性	
男	良	12(15)	9(13)	7(9)	11(11)	21(28)	18(20)	19(24)	20(24)
	不良	2(3)	1(1)	0(1)	0(1)	3(4)	0(2)	3(4)	1(2)
女	良	13(19)	16(21)	13(13)	6(11)	29(40)	19(23)	22(32)	26(32)
	不良	1(1)	4(4)	3(5)	0(2)	5(5)	3(7)	4(6)	4(6)

(数字は人数、括弧内はきょうだい総数)

ようだい仲の良い相手を、不良群の相手は仲の悪い相手を示している。男女合計して年長、年少を比較すると、良群の相手は年少者つまり弟妹の方が有意に多かった。不良群の人数は少ないが、傾向としては逆に年長の相手が多いようである。同性、異性間には明らかでないを認めないが、対象とした五歳代の幼児においては、きょうだい争いに性差はあまり関係ないのであろう。言葉の発達も一応完成し、体力も増し、好奇心も強くなる五歳児にとって、年少より年長の兄弟との対立の方がより増加するのも当然のことだろう。

この傾向は、二人以上のきょうだいのあるとき、そのどちらとよくけんかをするかと問うた場合にも同じであった。やはり年長、年少間に有意な差を認めた。

なお、けんかの相手との年齢差については、良群と不良群のそれぞれの相手につき、年長と年少別に平均年齢を算出したところ、有意とはいえないが、年長年少とも、良群より不良群に、幼児(五歳とす)の年齢により近い傾向があった。年齢の接したきょうだいの方が、その興味や要求も類似し、それだけ競争、衝突も生じやすいわけであらう。

まとめ

全体のまとめは次回のきょうだい仲と親の態度との関連を述べたあとで行なうが、とりあえずきょうだい仲の実態の結果をまとめると次のようになる。

- (1) 幼児のきょうだい仲は家族ないしきょうだい感情を背景に、全体としてよいものが多い。しかしかなり流動的であり、特に所有物に関する侵害をうけると争いを示すものも増してくる。
- (2) 幼児のけんかは所有、わけまえを動機とすることが非常に多い。とくにきょうだい仲のよくないとされるものに多い。
- (3) 口げんか、時に手を出すなど程度の軽いものが多いが、乱暴なものもないわけではない。危険には気をつける必要がある。
- (4) 五歳児のけんかの相手は年少より年長者が多いが、性別はあまり関係ない。年齢の近いものとの争いが多い傾向がある。

(大阪市立大学)